

2019年度

特別選抜Ⅲ アジア事情探究型（自己推薦入試）

適性検査

□ 一 次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

一七年の春ごろから日本のメディアでは中国のスマホ決済とシェア自転車などについての特集記事が、次々と報じられるようになった。それらは、これまで目立った中国に否定的な論調とは違い、前向きに捉える内容のものが多かった。

これまでに、一〇年の沖縄県・尖閣諸島沖における中国漁船衝突事件、一二年の反日デモを経て、日本人の嫌中感情は急激に高まっていった。一三〜一五年ごろには、在日中国人や在日韓国人へのヘイトスピーチが社会問題となった。

だが一七年になって、風向きが少し変わってきた。

中国についてある種の「固定概念」を持った「中国通ジャーナリスト」だけでなく、ITの発展という側面から起業家やエンジニアたちが中国に注目し、これを論じるようになった。

もともと中国専門家ではなく、先入観を持っていない彼らが、ニュートラルに(1)深圳の発展ぶりなどを新鮮な切り口で紹介する記事が多数メディアに載るようになり、「中国すごいぞ論」が日本のビジネス界にも広がってきている。

中国に詳しい友人のツイッターやブログなどを見ても、一七年に入ってから「中国の発展は本当にすごい。これまでも中国のエネルギーに圧倒されてきたが、ここまで「抜かれた感」を味わったことは一度もなかった」といったコメントが増えしてきた。私自身も、(中略)現地取材から帰った直後は「中国すごい」と、人に会うたびに連発していた。

ちやうどそのころ、ある週刊経済誌で中国特集が組まれたので読んでみた。そこには中国のITの進展に日本は負けている、という趣旨の見出しがあった記事もあった。

こうしたタイトルが、(記事の中身は別として)果たして多くの日本人読者に素直に受け入れられるものだろうか、という疑問が浮かんだ。

発売の五日後、同誌の編集者に話を聞いてみると「特集を組むにあたり、中国のほうが進んでいる、と書くことでアレルギーを示す人がいるので、そういう人たちにどうやって記事を届けるかという課題がありました」と話してくれた。

ツイッターなどの反応を見ると、案の定というべきか、「中国のこういう話は聞きたくない」というネガティブな意見が圧倒的だったという。また、「中国を(イ)シンポウするバカ者は、それによる弊害を一切見ていないのでは」「大げさな感じがするが、まあこういう雑誌だし仕方ない」という意見もあった。

この雑誌では定期的に中国特集を組んでおり、その編集者は〇一年の特集にも参加していたという。その特集も中国の(a)躍進を伝える内容だったが、彼によると、当時も掲載後、読者から「嘘を書くな！」という怒りの電話が何本もかかってきたそうだ。

中には「中国がこんなに進んでいるとは思わなかった」という感想もあったそうだが、私はこの話を聞いて、一部で「中国すごいぞ論」が盛り上がっているものの、この一六年間で、やはり「中国アレルギー」を持つ日本人の心のありようはあまり変わっていないと感じた。(2)「中国が発展している」「中国のスマホ決済はすごい」「日本よりも進んでいる」という記事を読めば読むほど、アレルギーを持つ人の嫌悪感は強まり、拒絶反応を誘発してしまう。

私には「中国アレルギー」を持つ人の心情を深くは理解できないが、推測するに、日本と中国の関係を「どちらが上か、下か」で見えてしまう側面が関係しているように思える。

その上で、長い間、下に見ていた中国に追い越されるかもしれないという現象を受け入れられないのだ。これは、ある種の恐怖心といてもいいかもしれない。だから、スマホ決済やシェア自転車など、日本では(ロ)フキユウが遅れるビジネスに関する報道に対しても、素直に耳を傾けることができない。

私は長い間、中国を見てきたが、あまりにも大きな経済格差があった二〇年前、三〇年前は、やはり日本人と中国人が「対

等」に話すことには無理があったのは確かだ。

中国人は、特権階級の人を除いて、海外へ出かけることはほとんど許されず、日本と中国の格差がどれほど大きいものであるかさえも知らなかったし、ビジネスというものもよくわかっていなかった。また政府の傘下にあるメディアでしか世界の情報を得ることもできなかったからだ。

ただし当時は、日中関係が比較的良好だったためか、一般の中国人も日本に対して表だって強い嫌悪感をあらわにするとはなかった。

中国人の反日感情が盛り上がってきたのは、経済が躍進し、ナショナリズムが盛り上がってきたころからだ。〇四年のサッカー・アジアカップでは、競技場にいた中国人が日本の代表チームやサポーターに向かって激しいブーイングを浴びせるなどの「(h)ソウドウ」が起きたことを覚えている人もいるだろう。

彼らの反日感情が最も盛り上がったのは、一二年九月の反日デモだ。デモの直接の原因は、日本が尖閣諸島を国有化したことに対する反発だったが、その裏には彼らの日常生活に対する不満や鬱憤があった。

日々の生活に不満を溜める人々は、それをはき出す機会を求めている。「愛国無罪」という言葉が象徴するように、当時、領土問題などで対日圧力を強めたかった政府の「(b)思惑」を敏感に察知した人々は、反日的な行動であれば、とがめられないと理解して暴力的なデモに参加した。

また、多くの参加者が「動員」されるなど、官製デモの側面があったことも、よく知られている。

第二次世界大戦で、日本は中国に大打撃を与えながら、戦後すぐに立ち上がり、驚異の成長を成し遂げて世界第二位の経済大国になったと認識されている。その陰で中国は国内の混乱が続き、国民は貧しい生活をしいられてきた。

(3)日中国交回復後、日本は中国に対して、さまざまな経済援助をして成長に寄与してきたが、その事実を多くの国民は知

らされていない。

そうした背景があり、隣国・日本に対して中国人はずっと(c)羨望やコンプレックス、怒りのような複雑な感情を抱いていた。それが中国内の経済格差による不満などもあいまって、尖閣国有化やサッカーの国際試合などナショナリズムを刺激する出来事が引き金となり、デモとして爆発したのだ、と私は中国人の取材を通して感じていた。

だが、わずか五年の間に、多くの中国人がコンプレックスを克服し、自信をつけつつある。その最大の(ii)コウロウ者はスマホであり、スマホによってもたらされた情報革命だろう。政府による情報統制は依然として続いているが、官製メディアでは報じられない情報もわかるようになり、確実に中国の人々の意識は変わりつつある。彼らは(d)貪欲に、前に向かって突き進んでいるのだ。

そして今、日本を見てみると、私たちは躍進する中国に対して、どのような感情を抱いているだろうか。表だって「中国アレルギー」の態度をあらわにするのは、ごく一部の人しかないが、多くの日本人の心底にも、アメリカと並ぶ世界の大国となり、経済強国を目指す中国を、なかなか素直に受け入れられない、という気持ちがあるのではないか。

もちろん、日本とは大きく異なる強権的、独善的な「体制」を持つ国が巨大化することに対して、不安や恐怖を抱くのはごく自然なことではある。

しかし、「中国アレルギー」を示す人々ほど極端ではないにしろ、多くの日本人が、潜在的に中国や中国人を「下の存在」として認識してきたために、その固定観念をなかなか捨てきれずにいる面がないだろうか。(中略)かつて中国で現地の人々を見下す日本人を数多く見て、私は不快な思いをさせられた経験がある。「立場の逆転」というものは、なかなか理屈では割り切れない、感情的に許容しにくいものである。

A ときなどもそうだろう。(中略)

だが、そもそも、国やそこに暮らす人々と自分たちを比較し、どちらが上か、下かという面で捉えることに間違いがある

のではないだろうか。一〇年に中国が日本をGDPで逆転したときに、(e)奇しくも中国人の男子大学生、張成氏は、「国と国の関係を上下関係で見るのはおかしい」といった。

もちろん、経済の発展度合いなど、数値化しやすい指標だけを見れば、国全体の状態として、どちらが発展している、していないと議論することはできる。

しかし、国と国、国民と国民について上下関係で捉えることは話が別だ。国同士、国民同士を上下関係で捉えれば捉えるほど、一人ひとり個性を持った相手の顔が見えなくなり、お互いを「日本人」「中国人」という、漠然とした架空のイメージだけで認識しがちになる。これはとても生産的とはいえない。

現に、(4)日本には中国を見下す人々がいるように、中国にも「小日本」という侮蔑的な表現とともに、反日意識をあらわにする人々がいる。彼らも、一四億人に迫る中国内ではごく一握りといつていい存在だが、その多くは日本に行ったこともなければ、生身の日本人と深く付き合った経験もほとんどない人々である。

一人ひとり違う個性を持った「顔のある人々」に素直な気持ちで向き合えば、それぞれ「日本人」「中国人」という固定化されたイメージとは、本当は違うことに気づく。それを理解することこそが、真の(ホ)セイジユクというものではないだろうか。(中略)

中国には日本には存在しない社会の構造的差別や複雑な制度があり、その詳しい事情を知らない日本人の目には「異質な国、異質な人々」と映る。また、歴史的、文化的背景から、日本とは文化・社会が大きく違う面があるのも確かだ。

しかし、彼らが生きている社会の背景をよく知れば、私たちが抱いている図式的な中国人像についても、文化・社会環境が彼らをそうさせている(そうせざるを得ない)面があることがわかる。

一皮むけば人間はみんな同じ、同じように喜び、同じように悲しみ、もがきながら必死で生きているということも理解で

きる。

それがわかれば、もっと素直に付き合えるし、もう少し寄り添い合える。少しでもいい関係になれるのではないかと思う。隣国に暮らす人々とうまく付き合っていくことによつて、日本人はもつと自信を持った魅力的存在になれるし、何よりそのほうが人として気持ちいいではないか、と私は思っている。

(中島恵『なぜ中国人は財布を持たないか』による)

問1 傍線部(a)～(e)の漢字を平仮名にしなさい。

(配点10点)

(a) 躍進

(b) 思惑

(c) 羨望

(d) 貪欲

(e) 奇

問2 二重傍線部(イ)～(ホ)の片仮名を漢字にしなさい。

(配点10点)

(イ) シンポウ

(ロ) フキユウ

(ハ) ソウドウ

(ニ) コウロウ

(ホ) セイジユク







二

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

「日本」で話されていることばが「日本語」であるのと同じような意味あいでは、「中国」で話されていることばを「中国語」と呼んでいる。けれども、これは近代国家としての(1)「中華民国」と「中華人民共和国」の国語（ナショナルランゲージ）だから、という前提があつての呼称である。書きことばの伝統が数千年のスケールに及ぶのは驚くべきことであるが、(2)今日私たちが言う「中国語」は逆に、近代国家の成立とともに整備された、実際は100年ほどの歴史しかない、とても新しいことばである。ちなみにこの「中国語」というのは間違いなく日本語での呼称であつて、これを現代中国語の漢字音に読み替えても中国語の単語にはならない。言語名の総称として国際的に通用しているのは〈中文〉である。〈中文〉はさらに広く〈中国語文〉〈中国文学〉の双方を(a)包括して使われる場合もある。言語に限定するなら大陸では〈漢語〉という言いかたも一般的だが、その意味するところは「漢民族の言語」というニュアンスが強い。これは本来、〈満語〉（満州語）〈藏語〉（チベット語）〈蒙語〉（モンゴル語）などに相対する呼称であつた。

近代以前の中国では、書きことばとして〈文言文〉が使われていた。私たちが学んだ「漢文」の文体である。この文言文というのは、なかなか面白い「文字上の共通語」であつた。文言文は、話しことばとはおよそかけ離れた、伝統的な漢字で表記する特別の文体であり、日常使われることの少ない(b)膨大な漢字や古典的な語彙について、相当な教育を受けた人間でなければ使いこなせなかつた。字が読める、というのは文言文が読めることだし、字が書ける、というのは文言文で作文ができることを含意していた。だから漢字を識っているなら綴るべきは文言文であつて、思ったことや話しことばをそのまま漢字で表記する、ということではなかつたのである。

それゆえ逆に、中国語以外の言語の話し手であつても、訓練をすれば文言文を書くことができた。一例を挙げるなら、蘭

方医の(3)杉田玄白、前野良沢がオランダ語から翻訳した『解体新書』は(返り点、送りがなつきの)漢文で書かれている。つまりは日本語であると同時に中国語の文言文に翻訳されたわけである。当時の日本人は文言文で書かれた中国の書籍を漢文として読みこなすいっぽう、当時の中国人は日本の近世までの(c)著作のかなりのものを、そのまま自分の言語で読むことができたのである。

いっぽうで近代以前の中国では、漢字漢文の教養の偏重が、官僚の養成と国の統治にあまりにも深く関わり続けた弊害が嵩じてきていた。条件に恵まれて高度な訓練を受けることができた者でなければコミュニケーションも公式な記録もできないうえに、修辞の技法などに高度に(d)形骸化した教養が求められていたからである。そのため、Aの形成にあたっては、一部の士大夫階級が独占する文言文を廃するという方向で国家語の整備が行われていく。20世紀初頭のアメリカに留学した思想家の胡適こせきは、国民国家における口語文の写実性と大衆的な情報伝達能力の必要性を痛感し、1917年に「文学改良芻議」という題名の論文を雑誌『新青年』に発表して、難解な文言文を廃し口語にもとづく白話文を提唱した。『新青年』は1915年創刊の雑誌で、魯迅、胡適、周作人などの北京の知識人が中心となって民主と科学を(e)標榜し、儒教イデオロギーの批判を展開していた。

この「文学革命」あるいは「白話運動」と呼ばれた口語文の提唱が、現代中国語の書きことばの基礎を築いていくことになるのだが、この運動が目指したのは話しことばに近い「新しい書きことば」の文体の模索と確立であって、話しことばそのものの漢字表記ではなかった。もし話しことばをそのまま表記しようものなら、Bからである。

たとえば「あいつは誰だ？」という話しことばを、そのまま漢字で表記してみよう。

〈他是誰呀?〉「北京」

〈伊是啥人啊?〉「上海」

〈佢係邊個呀？〉〔広東〕

このように、北京の話しことばと広東の話しことばとは、発音も語彙も文法も大きく異なり、感覚的には英語とドイツ語くらいの違いがある。現代の中国人どうしても、異なる方言の話し手との間では、北京方言に基づく共通語（普通話）に切り替えるか、場合によっては通訳を必要とする。これほど違いの大きいことばが同じ「中国語の方言」として扱われる理由は、文言文であれ現代口語文であれ、漢字による書きことばが、話しことばの差異を越えて共通であること、漢字を通じて方言と現代の標準語である普通話のみならず、方言どうしの間でも対応関係が成立すること、方言相互の関係が隔絶的ではなく連続したものであることなどによる。とはいえ、いずれも漢字を媒介として成立する考えかたであることに、「中国三千年の歴史」を感じざるを得ない。

以上のことからわかるように、近代的な国民国家の成立のためには、標準語の制定に向けた書きことばの刷新と統一が必要であり、言文一致の達成のためには、その背後に話しことばの標準化という前提が不可欠だったのである。

（池田巧『悠久にして新しい中国語の歴史』による）

問 1 傍線部 (a) ～ (e) の漢字を平仮名にしなさい。

（配点 15 点）

(a) 包括	<input type="text"/>
(b) 膨大	<input type="text"/>
(c) 著作	<input type="text"/>
(d) 形骸	<input type="text"/>
(e) 標榜	<input type="text"/>

**問 2** 傍線部(1) 「中華民國」とあるが、中華民國の成立前年に中国全土に広がった革命を何と呼ぶか、答えなさい。

(配点 5 点)

**問 3** 傍線部(3) 「杉田玄白、前野良沢がオランダ語から翻訳した『解体新書』は(返り点、送りがなつき)漢文で書かれている。つまりは日本語であると同時に中国語の文言文に翻訳されたわけである。」とあるが、『解体新書』が「日本語であると同時に中国語の文言文」であるとはどのような意味か。一〇〇字以内でわかりやすく説明しなさい。

(配点 8 点)

100		50	

問4

空欄

A

には文中にある同じ語句（八字）が入る。それを抜き出し、空欄

A

を補いなさい。

（配点5点）


問5

空欄

B

を補うのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

（配点5点）

- ① 口語文の写実性と情報伝達能力を失いかねない
- ② 漢字をアルファベットに代える必要性があった
- ③ 国民統合など成り立たなくなる可能性があった
- ④ 文書行政による国家統治が成り立たない可能性があった
- ⑤ 知識人と一般民衆との間に文化的格差が生じかねなかった

--

### 問6

傍線部(2)「今日私たちが言う『中国語』は逆に、近代国家の成立とともに整備された、実質は100年ほどの歴史しかない、とても新しいことばである」のはなぜなのか、「書きことば」「話しことば」の二語を入れ200字以内でわかりやすく説明しなさい。

(配点12点)

200	150	100	50				